特集1:最新の住宅環境

「冬、屋外では、何分ぐらい歩いても大丈夫ですか?」…その昔、道外の方から、冬の生活について電話で問合せを受けたことがありました。-15℃以下なる厳寒な日々にそんな疑問は無理もありません。

現在は四季を通じて本州と変わらない暮しを営むことはもちろん可能です。しかし、移住となると少し話が変わります。長期滞在や四季を通しての暮らしにいろいろな不安があると思います。

「ふらびズム」の専用サイトでは、富良野市の協力を経て、新築された富良野市北麻町にある公営住宅を例に富良野の住まいの例をご紹介しました。

バリアは少なく、暮らしやすく

※2014年2月に完成した公営住宅

サイトでご紹介した公営住宅は、建替えの時期で、もとの住宅に高齢者や単身者が多かったとのことから、新築でもコンパクトな間取りでした。そして、まず気づいたことは、高齢の方などへの配慮が施されていました。

そこで、バリアフリーの観点でご紹介しました。公営住宅(2階建て)の共用玄関は、北国の寒さを防ぐために入り口に扉がついています。入り口は引き戸で、車いすでも出入りがし易く、雪が積もっても開閉できる設計になっていました。

次に、2階の住戸へ行くための階段は、幅を広く取り段差を低くし両側に手すりが設置されていました。すれ違い易く小さな子どもでも上り下りしやすいように配慮されていました。

室内では、玄関、トイレ、バスルームなどあらゆるところに手すりがあり段差が無く生活導線にバリアがありませんでした。

※バリアフリーの室内に暖かい日差し

富良野は冬も快適

「真冬なのにTシャツでアイスクリームを食べる」…北海道の「あるある」です。そこまで極端な例でなくても、道内の室温は暖かく保たれています。なぜそのようなことができるのか?最新の公営住宅でその仕組を市建築課に教えてもらいました。

まずは外気を遮断する窓。2重かと思いきやシングルのサッシでした。断熱効果があるガラス窓が開発され、夏は暑さを遮断、冬は暖かい空気を逃さない効果があります。

外壁は、断熱材を含めた厚さが約30㎝にもなります。暖房設備は、住戸内にストーブに灯油を供給するコックと給排気口がすでに設置されています。

屋外にある灯油タンクから燃料が各住戸に供給され排気が屋外に出て行きます。灯油は契約業者が随時補充するので、「あ!灯油がもう無い!」と焦ることが全くありません。むしろ忘れてしまうほど。そして、請求明細を見て思い出すのです…。また、排気は、直接屋外に出るので灯油臭さを感じることはありません。

そして、水廻り。富良野の寒さは、配管内にある水を凍らせ、膨張した水が配管を破裂させてしまうことがあるので、配管から水を抜く「水抜き」が必要です。その作業は、この住宅では、ボタン一つ、ワンタッチで出来るようになっています。最近は外断熱の住宅が多く建物全体が暖かいので、長期間留守にしない限りほとんど水抜きは必要ありません。

「高断熱、高気密」と進化した寒冷地の住宅には24時間換気装置が付き、冷たい空気が直接中に入らない熱交換が可能なので室内はとても暖かく過ごすことができるようになりました。

ご紹介したのは新築の公営住宅なので、最新式の設備が合理的に施されています。すべての住宅がそうだとは限りませんが、この数年で北海道の住宅環境は急速に進化してきました。その背景には、過酷な北国の冬の環境を技術者によって改良する研究が日々成されているからなのです。

※水抜きはワンタッチ

※室内にある
灯油供給コック

【コラム】住まいへのアプローチ ～ふらびズムPeopleより～

山本真央さん(富良野GROUP)

笠倉要一さん(市内東山在住)

倉本聰さんの舞台を観て、富良野で作品作りを学びたいと移住を決心。「来れば、何とかなる!」と、身一つで移住にチャレンジ。

友だちも知人も、住まいのあてもないままに、とにかく「行く!」と移住。水道を凍らせたエピソードなど、大変なことも楽しそうに語る真央さん。今では女優業とバレエ教室を両立させているバイタリティー溢れる毎日です。

定年後、第2の故郷を作ろうと、埼玉からご夫妻で移住された笠倉さん。

移住の決心から2年。競売の富良野郊外の東山地域の旧教員住宅を落札し、柱と屋根を残して自分たち好みにリフォーム。

暮らし始めてわかる農村地帯と冬の生活に驚きと充実を体験した移住エピソードは、熟年ならでは、周到な準備とノウハウは、参考になることばかり。

特集2:富良野と演劇～演劇によるまちづくり～

富良野を舞台としたTVドラマ「北の国から」が放映されたのが、1981年。そして21年間放映された物語が2002年に終了してから12年。約30年の間に富良野市は大きく変わりました。農村地で超高齢化社会が加速され、深刻な担い手不足であることは変わりないのですが、日本の誰もがその名を知っている道内有数の観光地となりました。

そして、最も変わったことは、地域住民による「演劇によるまちづくり」の機運がハードとソフトを創りだしていることです。ふらびズムのサイトでは、幾度となくその情報を取り上げてきました。

倉本聰氏主宰　富良野GROUP

富良野市には、多くの演劇人が住んでいます。中でも、特出した存在が「富良野GROUP」のプロの演劇人の皆さん約40人。「富良野GROUP」とは、脚本家倉本聰さんが率いる演劇集団です。その前身は「富良野塾」で、1984年、倉本さんが富良野に開設した俳優と脚本家の養成機関でした。

毎年20人の若者が共同生活を送りながら、倉本先生の講義を2年間受けることができました。卒塾生は、375人に及びます。

2010年10月に閉塾後、引き続き「富良野GROUP」と名を改め、富良野演劇工場を拠点とした演劇活動や道内外での公演を行っています。一方、卒塾生たちはワークショップの講師としても活躍し「演劇によるまちづくり」を推進する原動力ともなっています。

※写真はすべて2014年1月上演マロース(提供:ふらの演劇工房)

太田竜介工場長、「ふらびズム」に降臨

※必見!太田レポート

2013年、地域の情報を発信してきた「ふらびズム」の動画に、太田竜介さんがレポーターとして登場してくれました。

太田さんは富良野塾10期生。2000年に市の公設劇場「富良野演劇工場」オープンの年、卒塾後の東京での暮らしから富良野に移住してきました。

劇場スタッフになるためでした。それから14年。演劇によるまちづくりの拠点「富良野演劇工場」の工場長として、施設管理、富良野GROUPロングラン公演の制作スタッフ、演劇のスキルを活かしたコミュニケーションワークショップの指導者として活躍しています。

「ふらびズム」では、富良野の暮らしぶりや魅力を伝えてもらうためレポーターでのご出演を依頼。超ご多忙にもかかわらずまさかのご快諾。面白おかしく、しかも温かいレポートぶりを一度クリックしてください。

演劇のまちづくりの拠点　富良野演劇工場

※富良野演劇工場外観

「演劇を創り出す」ための工場をイメージしネーミングされた「富良野演劇工場」が2000年10月、富良野市によって設立されました。

完成するにあたって、倉本聰氏が設計に深く関与くれました。客席302席。舞台は、横12.3m、奥行きが15m、リハーサルルームを使用すると最大で22mとなり、客席数とほぼ同じ広さの舞台を駆使することで多彩な演出ができるのが特徴です。

施設は、国内初のNPO法人「ふらの演劇工房」が、市から指定管理者の受託を受け運営にあたっています。

設立から14年。富良野演劇工場は、「演劇をテーマにするまちづくり」の拠点として、スタッフ、ボランティアの皆さんとたゆまぬ前進を続けています。

演劇祭と工場まつり

※市民劇「へそ家族」

さて、「演劇によるまちづくり」に話を戻します。その象徴ともいえるイベントが毎年、富良野演劇工場で行われています。

その一つが「演劇工場まつり」。NPO法人ふらの演劇工房のサークルなど日ごろの練習成果を発表する場で、会員に限らずオープンに開催されています。市民劇、ヒップホップなど、ステージでの発表会の他、模擬店など、演劇工場全体を利用した祭りが行われます。「企画を立てた当初は、この内容で集客が見込めるかと心配だったのですが、今ではすっかり浸透。発表内容が充実しているため、駐車場が大混雑するほど大盛況です」と太田工場長。市町村の文化祭とは一味違う富良野ならではの催事です。

また、「ふらの演劇祭」は、次世代の演劇人を育てる発表の場です。市開庁100年をきっかけに市内と近隣の小中学校で希望する学校と市民劇団「へそ家族」が参加する演劇の発表の場。

その最大の特徴は富良野GROUP(前述)の俳優や技術スタッフから演技やステージワークの指導が受けられることです。

※ヒップホップダンス

「プロの役者や技術スタッフから教えてもらう演劇や表現は、学校の授業とは違う学びがあるはず。将来、演劇甲子園のように全道の児童、学生が集まってくれるようなイベントになって欲しい」と太田工場長はその展望を語ってくれました。

地方都市には、必ず文化施設があります。富良野市でも文化会館があり、市民が自分たちで企画をし、文化活動、展示、研修会、文化祭など様々な目的で利用されています。そのような施設が地方都市には必ずありますが、2つも公設の文化施設があることは珍しく、「演劇によるまちづくり」を標榜する富良野市の一つの特徴といえます。